

産業疲労研究会 会報

1992年3月1日
(年1回発行予定)

編集・発行 産業疲労研究会（世話人：井谷 徹，上畑鉄之丞，近藤雄二，酒井一博，松本一弥）
事務局 〒634 橿原市四条町840 奈良県立医科大学 衛生学教室内（07442-2-3051）

産業疲労研究の当面の課題

代表世話人 上畑鉄之丞（国立公衆衛生院・疫学）

ここ数年の産業疲労研究会の歩みでは、夜勤交代勤務や一連続作業時間、VDT労働負担などに力が注がれ、齊藤良夫・前代表世話人を中心とした会員の努力で「産業疲労ハンドブック」（産業疲労研究会編，労働基準調査会発行，1988年4月刊）が集大成されるされるなど，大きな蓄積がおこなわれました。

ただ，疲労にかかわる研究課題はますます多面的になり，社会的に早急に対処すべき新たな問題も生じてきている状況にあります。どのような課題があるかを，1991年2月に岡山で開催された研究会時の世話人会で若干議論し，それ以降の研究会の企画等に反映する努力をしてきました。岡山での議論を整理して紹介しておきます。

1. **長時間労働の負担評価**：わが国の長時間労働が社会的に大きな問題になっているものの，産業疲労研究での蓄積は案外少ない。1960年代後半に，学会の特別委員会で労働時間を尺度とした勤務負担評価表が作成されたが，この内容には批判が多かった。高度技術革新や情報化が急速に進む現代の労働態様を考慮した，新たな労働時間とその負担研究を対策的におこなう必要がある。なお，この問題に関連しては，徳島で開催される第65回日本産業衛生学会時の自由集会（第38回産業疲労研究会）で具体的な共同研究の提案をしたいと考えている。

2. **ストレス研究**：職業ストレスに関する学会報告が近年急増しており，本研究会でもしばしば取りあげてきた。産業疲労研究のなかでストレスをどのように位置づけるかなど，基本的な整理をしながら，産業精神衛生研究会などとも協力して，今後も議論をすすめる必要がある。

3. **夜勤交代勤務労働**：第3次産業での不規則，長時間拘束の深夜勤務が増加しているものの，その実態や対策に関する報告は少ない。夜勤交代制問題では，ILO夜勤条約などの新しい展開もあり，今後も研究を深めていく必要がある。

今後，会員諸氏がこの会報や共同調査などを通して，情報交換や連絡を密にして研究をすすめていければと考えています。

活動報告

産業疲労研究会1991年度の活動報告

1991年度は、3回の研究集会を開催した。各研究会の発表抄録は、「産業医学」誌34巻1号以降に随時掲載される予定である。

【研究集会について】

第65回日本産業衛生学会時には、「産業疲労・ストレス対策と『作業管理』について」（1991年3月29日（金））をテーマに、大阪国際交流センター内で開催された。94名の参加があった。3人から以下の話題提供があった。「立ち作業とジャストインタイムシステム—その問題点を考える—」岸田孝弥（高崎経済大学）、「2, 3の事例からみた作業姿勢、一連続作業時間と疲労」大西徳明（東京農業大学）、「自動車部品組立工場におけるJIT導入と作業者の疲労」梶山方忠（神戸・労働医学研）。

「ジャストインタイムと労働負担」に関する研究集会は、立ち作業研究会との共催で、1991年10月19日（土）に中央大学駿河台記念会館で開催された。参加者は57名であった。研究集会は「作業姿勢と負担」（司会：門脇一郎（京府医大衛生））、「JITと労働負担」（司会：千田忠男（杏林大衛生））、「ジャストインタイムと労働者」（司会：近藤雄二（奈良医大衛生））の3部から構成され、9つの発表と総括討論が行われた。「労働と姿勢」大西徳明（東京農業大学）、「動作と姿勢」小野雄一郎（名古屋大衛生）、「身体移動と災害発生」三戸秀樹（近畿大医公衛）、「JITの原理と実際」岸田孝弥（高崎経済大学）、「婦人労働とJIT強制立ち作業」梶山方忠（神戸労働医学研）、「過労死事例からみたコンベアライン作業者の過重労働」上畑鉄之丞（国立公衆衛生院）、「JIT導入過程の問題点」千田忠男（杏林大衛生）、「トヨタ生産システムと社会・労働者への影響」野原光（日福大経済）、「今後

の研究課題」近藤雄二（奈良医大衛生）。

秋の第37回研究会は、1991年12月7日（土）に労働科学研究所で開催された。出席者は40名であった。一般演題は、越河六郎（労働科学研）の司会で4つの報告が行われ、シンポジウム「時短時代の交代勤務—改善にあたっての障害は何か—」は酒井一博（労働科学研）の司会で3人のシンポジストからの報告が行われた。また、ゲッチンゲン文庫が所蔵されている労働科学研究所図書館の見学会も行った。一般演題は、「長時間労働と疲労感について」千田忠男（杏林大衛生）・他、「「過労死」における過労について」斉藤良夫（中央大学文心理）、「長時間労働の健康問題に関する文献的考察」井谷徹・他（名古屋大衛生）、「ECRとPOSレテ作業による疲労感の比較」北山孝充（労働衛生協会）・他であった。シンポジウムのシンポジストは、安部健（日産自動車株式会社）、松井実（電源開発労働組合）、滝沢健二（日本鉄鋼産業労働組合連合会）であった。

【世話人会及び研究会運営に関する事項】

世話人会は6月と12月に行い、研究会会報の発行、長時間労働に関する共同研究などについて意見交換などを行った。

長時間労働と健康に関する共同研究の必要性については、前年度（1991年2月）の世話人会でも議論された。1992年12月の定例研究会では、井谷徹世話人が長時間労働と疲労・健康に関する文献的考察を報告した。この報告にもとづき、1992年3月の自由集会時に長時間労働と健康に関するプロジェクト（仮称）を提案することにした。

昨年開始した会員登録者は、現時点で161名となった。なお、1992年度の秋の定例研究会は、名古屋市立大学で開催する予定である。

事務局からのお願い

事務局から発送する案内等が転居先不明で返送されるケースがでてきています。登録会員の方で所属先や送付先住所の変更が生じた場合には、事務局にご一報下さるようお願いいたします。

時短時代の交代勤務

－改善にあたっての障害は何か－

シンポジスト 安部 健（日産自動車）
松井 実（電力総連）
滝沢健二（鉄鋼労連）
司 会 酒井一博（労働科学研究所）

今回のシンポジウムでは、“時短”時代の交代勤務をどう改善していけばよいかを考える素材として、職場での経験豊富な3人の講師から、現在までの到達点、今後の時短戦略、勤務ローテーションの改善方向、さらに研究者への要望点や協同作業の可能性について報告願った。

安部（日産自動車）は、1.自動車産業は所定内労働時間は短い、所定外が長い。2.日産自動車の場合、年間1960時間（1991年）であるが、さらなる時短の布石として週番型2組2交代から、連続型の3組2交代制への移行が検討されている。3.自動車産業は薄利多売型の産業である。そのため生産台数の維持が不可欠であり、時短を困難にしている。また過剰販売競争下であり、時短の達成には経営者の協力体制が課題である。4.労働時間短縮をはかっていると、優秀な人材の確保も困難となり、健全経営が阻害される。その一方で、高生産を維持するための年間労働時間の確保も必要であり、従業員の時短や休日増などの期待との整合性をどうはかるかがこれからの課題の一つである。労使が協力し、産業構造全般を見直す時期にある。

松井（電力総連）は、1.電力業界では交代勤務者は約10%で、少数派である。現在、年間1920時間の水準にあり、3交代勤務と日勤勤務とを組み合わせ、5組3交代制を採用している。2.1993年を目標に、年間1800時間達成の努力をつづけているが、要員対策の面で苦慮している。3.時短を妨げているものとして、ギリギリの要員、電力の安定供給義務、業務の高度化、平等主義の4点が考えられる。4.今後、交代勤務者に対する多面的

な手当が必要である。労使関係として、交代要員の確保、適正なローテーションの確立（キャリア形成）、健康管理の徹底、職場環境・家庭環境の整備、社会・地域活動における日勤者以上の配慮などがあり、また、社会環境として、法整備（ILO条約の法制化）、年金受給資格の緩和、交代手当の非課税化、交代勤務者用住宅の建設などが必要である。5.電力労働者の時間短縮が進まない理由の一つに、所定外労働の多さがある。これは安定供給という名の「電力は（簡単には）止められない」という制約によるところが大きく、深夜労働や休日労働にかなり依存している実態にある。「電力は時には止まるもの」という社会認識の醸成が必要である。

滝沢（鉄鋼労連）は、連続操業型交代勤務の時短方法と今後の課題について報告した。1.火を絶やせない装置型産業であること、昼夜同一の生産水準と労働内容をもつこと、交代勤務者が過半数を構成することが鉄鋼産業の交代勤務の特性といえる。2.「労働時間短縮指針」の策定作業を通じて、交代勤務者の時短問題を検討してきた。3.91春闘で、「時短中期ビジョン」に労使が合意した。4.交代勤務者の時短を進めるうえでは、①労働力不足時代の到来の与件として、②次世代製鉄法など画期的技術革新に期待、③労働生活をより人間的なゆとりあるものに、という3つの視点が重要である。5.新たな交代制シフト編成の研究を続けてきたが、シフト編成問題の解決には大きなコスト負担増を伴うこと、年間122日の休日可能な9組3交代制が当面の到達目標であること、さらに究極の交代制として5組3交代制を目指している。

しかし、時短が目標ではない。「人間的で快適な労働生活の創造」こそが重要であり、この“ゆとり”を象徴する労働時間の短縮と勤務態様の改善を、いま目指している。

今後、産業疲労研究をつづけるうえで、示唆に富む報告と討論が出来た。（まとめ：酒井一博）

会員つうしん

「OA作業は疲れるのでしょうか？」

岩崎昭浩（富士通（株）デザイン研究所エルゴノミクス課）

「OA作業は、疲れるものなのですか？」お客様からときどきこのようなご質問をいただきます。OA機器を利用すると短時間に多くの仕事を効率的に行うことができますが、その分、無意識的に多くの質の異なる判断を行っています。たとえば、ワープロで文章を作る時、私達は、文章の内容を考えたり、次々と変換される漢字の中から正しいものを選んだり、ワープロの次の操作を考えたり、このように質の異なる判断を次々に行っています。ですから、このOA作業の特徴を忘れて機械のペースで仕事をしてしまった場合など、疲れたと感じる可能性があります。しかし、この種の疲労は適切な機器を選択して、作業の進め方や労働衛生教育などの適切な運用管理や、机や椅子や照明の改善やオフィス改善等の環境整備を行うことにより回避することができます。

富士通では、ハードウェア、ソフトウェアの改善を推進することは勿論、エルゴノミクス課が中心となり、OA機器を使用するうえで発生するお客様の様々な疑問にお答えしたり、OA機器の運用や、環境整備のコンサルティングを行い、お客様の快適なOA作業実現のお手伝いをしています。

「測りまちがえ」の話

斉藤良夫（中央大学・文・心理）

自然科学とは、ある研究対象を一定の方法で測定してその結果に基づいてそれに関する理論を構築・検討する認識方法である、と一般に考えられています。周知の通り、人間の疲労に関して今まで数多く

の種類指標がつくられ、また用いられて研究が行われてきました。しかしその結果、「疲労とはなにか」がわからなくなり、「疲労という言葉は科学的な概念ではないから使わないほうがよい」という研究者まででてくることになりました。研究者にとって、研究をすればするほど自分の研究対象がわからなくなるというのは、なんともおかしなことですが、しかし、疲労概念はいまでも科学の世界で十分な市民権をもっています。

人間のストレスに関する研究にも、まったく同じことがいえるようです。世界中の研究者がストレスに関するさまざまな指標をつくり、それで測定されるものがストレスであると定義して、いろいろな人間を対象にして研究してきました。その結果、「ストレスとはなにか」に関する議論は、1992年の現在ではもはや大混乱になることを免れないようです。

現在流行している科学の認識方法を生きて生活している人間に当てはめる場合、科学者は「測りまちがえる」ことがあるようです。

産業疲労研究会では、労働者の職務や作業によるストレスに関する研究の発表が今後ますます多くなることでしょう。そこでの議論がストレス研究を混乱ではなく発展させるように、お互いに「大胆に」かつ「注意深く」論議し合う必要があるでしょう。

姿勢をはかる

瀬尾明彦（広島大学・医・公衆衛生）

生体計測に興味を持ち、現在はタイムスタディのための作業姿勢測定装置の開発・研究を行っています。肉眼による姿勢判定は極めて巧妙で、同様なことを機械で自動化するのは大変です。動作計測用の機器はいくつか実用化されていましたが、装置が大きかったり人間の体にやぐらを組むようなものばかりで、現場での調査には利用できそうにありません。幸いエレクトロニクス関係の雑誌に関節角度計に流用できそうな新しいセンサーをみつけたので試したところ、なかなかうまく測定できることがわかりました。次の問題は測定した関節角度から姿勢を分類

する問題です。関節角から人の姿勢を再現する場合、関節角がほんの数度違ってても眼でみた姿勢とはまったく異なってみえてしまいます。最近話題のバーチャル・リアリティ（仮想実体験）も同様な装置を使うため、同じ問題があるそうです。当初は関節角の範囲や重心位置などから姿勢を分類する予定でしたが、眼でみた姿勢との一致が必ずしも良くなく悩まされました。一時は曖昧なデータの判別に強いニューロコンピュータの利用も考えましたが、結局簡単な判別分析で十分正確に姿勢判別できることがわかりこの問題もほぼ解決しました。計測機器は新しいセンサーが開発されると大きく発展します。現在もいくつか新しいセンサーを検討しています。同時に装置全体の小型化や簡便な利用法についても検討中なので、別の機会に報告させて頂きたいと思います。

産業疲労研究 はじめと未来

大西徳明（東京農業大学・生物産業学部）

北の網走の地に赴任してから3年目の冬を迎えている。情報は遅く、機材の調達は不便である。しかし、のんびりと自然がいっぱいである。冬は研究室の前でスキーを付け、裏山で汗をかくことができる。徹夜して混雑するスキー場に足を運ぶことからみると夢のようであるが、若い人は都会への生活を求めている。それは魅力的な仕事が都会にあるからであろうし、マスコミが「豊かな生活」をあおる。“新しい日本の生き方を変えるとき”と幾度も指摘されるが変わる方向は定かにみえない。

「産業が疲労する研究」などと質問を受けたことがあるが、研究会が進めてきた調査例の報告、測定評価、改善方法の検討などを説明したら、「疲労」の意義については同意を得たようだ。この研究会が何をすべきかについては、“ストレス”の測定評価、研究（これはどうも広い時間軸での問題としてらしい）とか、“巧みな休息”の検討などを進めなければと聞く。やはり、事例調査の報告は積極的にやらなければと考えます。

超SFでは頭部にセットしたヘルメット状のカブ

セルで、“疲労度が測定”され、神経接合部にプラズマ刺激が加えられる。このような恐怖の測定法が支配することのないように自律ライフスタイルの確立を目指したいものです。会報の発刊に当たって近況まで。

「職種名や業種名」にまどわされた話

近藤雄二（奈良医大・衛生学）

現場をみる機会がもてないままに、広範囲のそれも多数の産業労働者を対象にしてアンケートの手法で疲労状況や健康調査をしなければならない時がある。この時いちばん苦慮するのが、疲労の指標としてどういう項目を並べるかではなく、職務負担特性を反映させられる「業務・職種あるいは職業」分類をどうつくるかである。日本標準産業（職業）分類に準拠した項目を使い、同じ業種名や職種名として結果をまとめても、作業条件や職務内容からみると全く異なったものがひとまとめにされてしまうことから、訴えが算術的に平均化されてしまい、職種間の差異が全く浮かびあがらず、労働者の実感とはズレたまとめにしかならなかった苦い経験がある。

反対に、毎年、国が公表する業種別の業務上疾病件数の統計資料から、労働者の疾病の実態の一端や健康対策の手がかりを考えると、この名目的な「業種」分類にまどわされてしまうことがあった。「運輸交通業」は、毎年、非災害性も含め腰痛発生病件数が多い業種として知られている。その多くがタクシーやトラックなどの運転業務だろうと勝手に関連づけて、その想定のもとにわが国の職業性腰痛の実態をつかんでいる気になっていた。ところが、ここに少なくないステューアード（航空機客室乗務員）が含まれているという事実を知り、国全体で1万1千人前後の職種集団の発生率としてみると、わが国では稀な腰痛多発職種であることを教えられる機会があった。この作業の紹介は別の機会にしたいが、名目的な「職種・職業・業種」分類にまどわされ、間違った認識と理解をしていたことになる。このようなことのないように。と自戒するこの頃である。

《資料》

産業疲労研究会のテーマ・発表演題一覧（1970年～1991年）

会報の発行に際し、1970年以降、産業疲労研究会で取り上げてきた研究会のテーマや一般発表の演題名を一覧表として掲載いたしました。研究会の開催年月日、開催都市とともに「産業医学」誌に研究会記録（抄録）が記載されているものは、巻、頁、発行年も記しました。

1970年

第15回（1970.12.12, 場所不明）「産業医学」誌の記録及び抄録：無し

〈シンポ〉：産業疲労の調査方法と調査項目

（疲労調査項目に関するアンケート集録をもとに自由討論）

1971年

第16回（1971.11.1, 東京）Vol.14, P482, 1972

〈シンポ〉：筋作業と疲労

1. 静的筋作業における疲労の段階区分, 佐渡山亜兵（製品科研）, 他
2. 尿中総還元力の評価について, 坂本 弘（三重大医衛生）
3. 労働負担の2, 3の血液値, 中村正（長崎大医衛生）
4. 筋的作業を主とした疲労調査事例, 森岡三生（労働科学研）, 他

〈一般演題〉

1. 集中維持機能（TAF）の機械化事務作業への応用, 菰池義彦（住友病院産衛研）
2. 注意集中と誘発電位, 大谷 章（製品科研）, 他
3. 疲労自覚症状項目の疑問点, 越河六郎（労働科学研）
4. 種々の生態負担指標によるヒトのcircadianrhythmのdesynchronizationの検討, 佐伯*（慈恵医大宇宙医）

1972年

第17回（1972年, 場所不明）産業医学, 特別号, 168-169, 1979

〈テーマ〉：監視・制御作業の疲労の見方

1. 自動車運転手の監視行動の様態, 近藤 武（日本大）
2. 監視における途切れ, 小木和孝（鉄道労研）
3. オペレーターの数種機能の監視作業中推移, 石川 昭, 他
4. 列車種別からみた運転者の疲労, 橋本邦衛

1973年

自由集会（1973.4.7, 大阪）

内容不明

第18回（1973.11.27, 名古屋）16, 156-158, 1974

〈テーマ〉：繰り返し作業のlocal stressとimpairment

1. 電話交換手の作業条件と疲労自覚症状について, 黒江敏治（関東通信病院労医研）
2. 頸肩腕障害の発生職種の広がりや発症要因について—労働衛生相談症例より—, 前田勝義（名大医衛生）
3. 単純検査作業における作業負担の解析, 神代雅晴（北海道工大）, 他
4. 模擬チェッカー作業の筋的負担について, 大西徳明（労働科学研）, 他
5. 繰り返し静的筋作業における疲労のおこり方について, 佐渡山亜兵（製品科研）
6. 筋的作業の疲労と障害, 森岡三生（日本大医衛生）

1974年

自由集会（1974.3.29, 名古屋）

内容不明

第19回（1974.12.6, 場所不明）

〈テーマ〉：検査作業の負荷と疲労

1. 視覚的検査作業の疲労—実態調査—, 北川陸彦（大阪府公衛研）

2. 視覚的検査作業の疲労—実験—, 石橋富和 (大阪府公衛研)
3. 視覚検査の一実験—検査項目と検査刺激密度—, 大谷 章 (製品科研)
4. 目視検査とラインスピード, 林 栄一 (新日鉄広畑製鉄)
5. 検査作業における生体負担, 神代雅晴 (北海道工大), 他
6. 検ピン作業と眼球運動, 飯田祐康 (労働科学研)
7. 視覚的検査作業の労働負担と健康実態, 中迫 勝 (関西医大衛生), 他

1975年

自由集会 (1975.7.15, 北海道)

内容不明

第20回 (1975.12.8, 東京)

〈テーマ〉: 負担要因別にみた作業分析の視点

1. タクシー労働者の長時間運転労働に関する観察を中心とした調査事例, 酒井一博 (労働科学研)
2. 電算機オペレーターの作業負担評価の試み, 石橋富和 (大阪府公衛研)
3. 上肢負担の大きいスーパーマーケット作業者の健康障害と作業条件, 大原啓志 (岡山大医衛生)
4. 作業チェックリストの応用経験, 小木和孝 (鉄道労研)

1976年

自由集会 (1976.4.1, 岡山)

内容不明

第21回 (1976.12.8, 東京) 20, 67-68, 1978

〈テーマ〉: 日常的疲労の把握と評価

1. 疲労を考える, 森岡三生 (日本大医衛生)
2. 事務的作業におけるフリッカー値の日常変化について, 黒江敏治 (関東通信病院労医研)
3. 疲労評価における指標とコントロール値の問題, 長塚康広 (新潟大心理), 他
4. 労働負担意識について, 斎藤良夫 (鉄道労研)
5. 単純反復作業者の筋負担と身体能力に与える影響, 大西徳明 (労働科学研), 他

1977年

自由集会 (1977.4.5, 久留米) 21, 111, 1979

討議話題: 疲労研究今後の課題

第22回 (1977.12.10, 東京) 21, 100-101, 1979

〈テーマ〉: 過労を考える

1. 筋疲労に関連する諸問題, 紺野義雄 (筋肉医学研)
2. 過労性健康障害について, 中村美治 (鬼子母神病院)
3. 高速バス運転手の疲労調査, 千田忠男 (杏林大医衛生), 他
4. 過労による死亡の業務上外認定, 上畑鉄之丞 (杏林大医衛生)

1978年

自由集会 (1978.5.31, 松本) 22, 74, 1980

討議話題: 一連続作業時間と必要休憩時間について

第23回 (1978.11.13, 大阪) 22, 74, 1980

〈シンボ〉: 疲労と個人差

話題提供者: 中迫勝 (関西医大衛生), 大西徳明 (労働科学研),
斎藤良夫 (鉄道労研), 越河六郎 (労働科学研), 坂本 弘 (三重大医衛生)

1979年

自由集会 (1979.4.3, 東京) 23, 103, 1981

話題: 望ましい一連続作業時間と休憩

話題提供: 狩野広之 (労働科学研)

第24回 (1979.12.8, 東京) 23, 327-330, 1981

- 〈特別講演〉: ① 時差ボケの本態と対策, 横堀 栄 (防衛医大)
② 生体リズムと睡眠, 遠藤四郎 (都精神医学研)

〈一般演題〉

1. 筋電図による疲労と痛みをデジタル表示する装置, 紺野義雄 (筋肉医学研)
2. 交代制勤務における生体負担, 本間 寛 (北海道大医衛生), 他
3. 警備員の夜勤・交代勤務の労働負担, 松本一弥 (杏林大医衛生), 他
4. ゴミ収集作業員の労働負担, 井谷 徹 (労働科学研), 他
5. 中間管理職の残業と労働負担, 岸田孝弥 (高崎経済大)
6. 深夜トラック便の労働時間と休息, 堀野定雄 (神奈川大工)

1980年

自由集会 (1980.5.14, 仙台) 23, 456-457, 1981

- 話題: 社会衛生学の観点から産業疲労研究の方向を探る
話題提供者: 東田敏夫 (関西医大公衛), 斉藤 一 (労働科学研)

1981年

自由集会 (1981.4.5, 徳島) 24, 559-560, 1982

- 話題: 疲労と文化
話題提供者: 吉竹 博 (高知大心理), 越河六郎 (労働科学研)

第25回 (1981.10.10, 東京) 24, 333-335, 1982

〈一般演題〉

1. 上肢の一連続作業時間と休憩について, 大西徳明 (労働科学研), 他
2. Circadian Rhythmと同期化因子と時差, 交代勤務の問題, 横堀 栄 (防衛医大衛生), 他
3. 眼精疲労についての一考察—各種現作業者の眼調節能の動態—, 斉藤むら子 (日本大医衛生)
4. “自覚症状しらべ”は疲労のテストになりうるか, 斉藤良夫 (中央大文心理)

1982年

自由集会 (1982.4.4, 名古屋) 25, 320-321, 1983

- 話題: 疲労研究に関連する労働衛生学的概念の再構築—作業強度, 労働負担度の評価と許容水準の判定—
話題提供: 森岡三生 (日本大医衛生)

第26回 (1982.11.27, 東京) 25, 281-285, 1983

〈テーマ〉: 一連続作業時間をどう考えるか

1. 「自覚症状しらべ」による一連続作業時間評価の問題点, 斉藤良夫 (中央大文心理)
2. 文書作成オペレータの連続作業時間, 大西徳明 (労働科学研)
3. データ入力作業における連続作業時間の調査例, 堀野定雄 (神奈川大工), 他
4. スイスにおけるVDT視覚負担研究からみた一連続作業時間, 西山勝夫 (滋賀医大予防医学)
5. 連続作業調査の経験から, 酒井一博 (労働科学研)

1983年

自由集会 (1983.4.4, 大阪) 頸肩腕障害研究会と合同, 25, 149, 1983

〈テーマ〉: VDT作業の労働負担と健康障害

1. CRTディスプレイを用いた作業負担—表示法と文字特性の効果, 田井中秀嗣 (大阪府公衛研)
2. VDT作業による健康障害とその研究課題, 西山勝夫 (滋賀医大予防医学)

第27回 (1983.12.3, 東京) 26, 262-264, 1984

〈一般演題〉

1. 表示特性とパフォーマンス, 田井中秀嗣 (大阪府公衛研)
2. 視覚検索作業における生理的負担, 大西徳明 (労働科学研), 他
3. VDT作業開始前後の自覚症状の比較—職場実態調査より, 前田勝義 (久留米大医環境衛生), 他
4. VDT作業者の視覚器の疲労調査, 阿部真雄 (杏林大医衛生)

5. VDT作業者の目の疲れ, 落合孝則(昭和大医眼科), 他
6. 某計算センターにおける産業疲労調査の長期観察結果, 菰池義彦(住友産研), 他

1984年

自由集会(1984.6.12, 札幌) 27, 126, 1985

話題: 長時間労働と健康の諸問題,

話題提供者: 上畑鉄之丞(杏林大医衛生)

第28回(1984.12.1, 東京)

〈一般演題〉

1. 筋力筋電図からみた頸肩腕障害の回復について, 紺野義雄(筋肉医学研)
2. 立位作業における姿勢負担の調査事例について, 近藤雄二(奈良大医衛生)
3. 夜勤者の経験からみた有効な仮眠条件, 酒井一博(労働科学研)
4. 交代勤務者の年齢別にみた睡眠に及ぼす影響, 松本一弥(杏林大医衛生), 他
5. ポケットフリッカーの試作, 細川敏幸(北海道大医衛生), 他
6. 眼精疲労自覚症状とフリッカー・近点距離・TAF・視機能測定値等との関連性, 菰池義彦(住友産研)
7. VDT作業者の作業感情調査の一考察, 堀江良典(日本大生産工), 他
8. VDT作業時の視距離について, 斉藤進(産医研), 他
9. VDTおよびテレビレビュー作業の視機能検査成績について, 宇土博(広島大医公衛), 他
10. VDT作業における照明環境の実態について, 高橋誠(労働科学研), 他

1985年

第29回(1985.12.1, 大阪) 28, 298-302, 1986

〈テーマ〉: 過労の見方

1. 夜間における運転作業の必要照度に関する調査研究, 三戸秀樹(近畿大医公衛)
2. アンケート調査よりみたCRT表示装置の特性と目の症状との関係, 田井中秀嗣(大阪府公衛研), 他
3. 疲労感と健康度に関して一とくに精神疲労と眼疲労, 斉藤むら子(産医大)
4. 長距離トラック運転手の脳出血死亡例の検討, 上畑鉄之丞(杏林大医衛生)
5. 学校給食調理作業者の負担要因と疲労, 大西徳明(労働科学研), 他
6. 腰痛の疫学的アプローチ, 青山英康(岡山大医衛生), 他
7. 疲労自覚症状の訴えからみた長時間残業, 斉藤良夫(中央大文心理)
8. 交代勤務者の疲労感と睡眠習慣, 石橋富和(大阪府公衛研)
9. 睡眠構造からみた疲労回復, 松本一弥(杏林大医衛生)

1986年

自由集会(1986.4.1, 広島) 28, 394-395, 1986

話題: 産業疲労研究の新しい課題

話題提供者: 斉藤和雄(北海道大医衛生)

第31回(1986.11.30, 東京) 29, 437-438, 1987

〈テーマ〉: 産業疲労研究を考える

話題提供者: 石橋富和(大阪府公衛研), 越河六郎(労働科学研), 斉藤和雄(北海道大医衛生)

〈一般演題〉

1. BMG BIO-FEED・BACKを用いた姿勢の研究, 大西徳明(労働科学研)
2. 新疲労判定法(VRT)習熟効果, 細川敏幸(北海道大医衛生), 他
3. 新幹線電車の高速度運転負担, 池田守利(鉄道労研)
4. 微細ノズル加工工場における疲労調査, 井谷徹(岡山大医衛生), 他

1987年

自由集会(1987.4.7, 東京) 頸肩腕障害研究会と合同, 29, 325-326, 1987

〈テーマ〉: 頸肩腕障害の予防を考える

1. 頸肩腕障害の予防を拒むものは何か, 北山孝充(中災防労働衛生検査センター)
2. 臨床専門医と衛生産業医との溝, 菰池義彦(住友病院)
3. 産業疲労からみた頸肩腕障害予防, 井谷徹(岡山大医衛生)

1988年

第32回 (1988.2.6-7, 名古屋) 30, 490-493, 1988

〈パネル〉：長時間・不規則勤務と労働者の疲労，ストレス

1. 長時間労働と健康障害，上畑鉄之丞（国立公衆衛生院）
2. 航空機客室乗務員の勤務と疲労，小野雄一郎（名古屋大医衛生）
3. 長時間・不規則勤務の実態と改善方向，酒井一博（労働科学研）

〈一般演題〉

1. 調理作業における作業姿勢負担とその対策，大西徳明，他（労働科学研）
2. 給食調理作業における休憩効果—自覚症状の解析を中心として—，甲田茂樹，他（岡山大医衛生）
3. 作業域からみた作業姿勢の問題，近藤雄二（奈良大医衛生）
4. 数値データ入力作業において入力方向とポイントの有無がパフォーマンスに及ぼす効果，田井中秀嗣
5. 睡眠不足の蓄積影響とその「返済」の仕方，松本一弥（杏林大医衛生）

第33回 (1988.4, 金沢) 頸肩腕障害研究会，腰痛研究会と合同31, 32-33, 1989

〈テーマ〉・長時間・不規則勤務の実態と労働者の疲労・健康障害

1. 長時間勤務の実情と疲労，酒井一博（労働科学研）
2. 運輸労働者の労働と健康，久繁哲徳（高知大医公衛）
3. 頸肩腕障害発症と労働時間の問題，北山孝充（労働衛生協）
4. 頸肩腕障害発症と労働時間の問題，小野雄一郎（名古屋大医衛生）

第34回 (1988.11.26, 東京) 31, 184-186, 1989

〈一般演題〉

1. 簡易筋圧痛計の試作と疲労部位，大西徳明（労働科学研）
2. 筋疲労と活動電位の伝導速度，佐渡山亜兵（製品科学研）
3. 林業労働者の作業と有酸素的作業能，車谷典男，他（奈良大医公衛）
4. 腰部負担評価に用いたチェックリスト，近藤雄二（奈良大医衛生）
5. プリント板検査作業者の目の疲れと肩こり，落合孝則，他（富士通健管）
6. 2～3の職種の労働・生活時間，小野雄一郎，他（名古屋大医衛生）
7. 職場のストレスと健診結果，宮尾 克，他（名古屋大医公衛）

1989年

自由集会 (1989.4., 青森) 32, 291-292, 1990

1. 自律神経反応からみた労働負担の年齢差，須藤綾子（産業医学研）
2. 保育労働者の労働・生活上のストレス，小野雄一郎（名古屋大医衛生）

第35回 (1989.12.2, 中央大学駿河台記念会館) 32, 232-235, 1990

〈特別講演〉：過激な運動における身体的ストレス，岩根久夫（東京医大）

〈一般演題〉

1. 路線トラック運転手の循環器への負担，前原直樹（労働科学研）
2. 最近の夜勤交代勤務の状態，山田信也，他（名古屋大医衛生）
3. 眼球運動からみたVDT作業の特性，三澤哲夫，他（東海大医衛生）
4. オフィス・ワーカーのストレス調査結果とストレス・モデル，山崎喜比古，他（東京大医保健社会）
5. コンピュータ・ソフト労働者の長時間労働と健康，林 丘（電算労）
6. コンピュータ化が関連した過労死相談事例，上畑鉄之丞（国立公衆衛生院）
7. 指曲がり症をめぐって，天明佳臣（港町診療所）

1990年

自由集会 (1990.4.3, 熊本)

話題：産業労働者の疲労とストレス—そのとらえ方をめぐって—
話題提供者：越河六郎（労働科学研），神代雅晴（産業医大）

共催シンポジウム (1990.12.1, 東京) 人類動態学会との共催, 33, 139, 1991

〈シンポ〉: 現代日本の労働と産業疲労・ストレス

1. 日本における最近の産業疲労研究と労働者のストレス研究の状況, 斉藤良夫 (中央大)
2. 頸肩腕障害と作業負担, 井谷 徹 (岡山大医衛生)
3. 現代的労働における腰痛問題と対策, 大西徳明 (東京農大)
4. VDT労働の視覚負担—新聞編集へのVDTの導入と視覚への影響について, 宇土 博 (広島大医公衛)
5. 看護婦の燃えつき症候群—職業性要因の影響について—, 久繁哲徳 (高知大医公衛)
6. コンピュータソフト労働者のストレス, 山崎喜比古 (東京大医)
7. 東京におけるビジネスマンの労働とストレス, 唐木正敏 (原宿診療所)
8. 過労死事例と長時間労働, 上畑鉄之丞 (国立公衆衛生院)
9. 航空機客室乗務員の労働と疲労, 小野雄一郎 (名古屋大医衛生)
10. 不規則勤務による勤務負担とその改善方向, 酒井一博 (労働科学研)

1991年

第36回 (1991.2.2, 岡山) 腰痛研究会との合同, 33, 287-271, 1991

〈パネル〉: 疲労対策からみた腰痛問題

1. 産業現場における疲労対策の考え方, 酒井一博 (労働科学研)
2. 生協における腰痛対策, 安達隆 (汐田理学診療所)
3. トヨタにおける腰痛対策, 入谷辰男 (トヨタ健康管理)
4. 腰痛対策の現状と今後の課題, 徳永力雄 (関西大医衛生)

〈一般演題〉

1. 米穀運搬作業者の腰痛ベルトの効果について, 宇土 博 (広島大医公衛)
2. 重症心身障害児施設等における作業負担, 徳永力雄 (関西大医衛生)
3. 郵政内務業務の腰痛, 上畑鉄之丞 (国立公衆衛生院)
4. 立位作業における座位化の検討, 近藤雄二 (奈良大医衛生)
5. スーパーマーケット従業員の労働負担, 岸田孝弥 (高崎経済大学)

自由集會 (1991.3.29, 大阪)

〈テーマ〉: 産業疲労・ストレス対策と『作業管理』について

1. 立ち作業とジャストインタイムシステム—その問題点を考える—, 岸田孝弥 (高崎経済大学)
2. 2, 3の事例からみた作業姿勢, 一連続作業時間と疲労, 大西徳明 (東京農大)
3. 自動車部品組立工場におけるJIT導入と作業者の疲労, 梶山方忠 (神戸労医研)

共催研究集會 (1991.10.19, 東京) 立ち作業研究会との共催

〈テーマ〉: ジャストインタイムと労働負担

1. 労働と姿勢, 大西徳明 (東京農大)
2. 動作と姿勢, 小野雄一郎 (名古屋大医衛生)
3. 身体移動と災害発生, 三戸秀樹 (近畿大医公衛)
4. JITの原理と実際, 岸田孝弥 (高崎経済大学)
5. 婦人労働とJIT強制立ち作業, 梶山方忠 (神戸労医研)
6. 強制立ち作業と過労死, 上畑鉄之丞 (国立公衆衛生院)
7. JIT導入過程の問題点, 千田忠男 (杏林大医衛生)
8. 今後の研究課題, 近藤雄二 (奈良大医衛生)

第37回 (1991.12.7, 神奈川)

〈シンポ〉: 時短時代の交代勤務—改善にあたっての障害は何か—

話題提供者: 安部 健 (日産自動車株式会社)

松井 実 (電源開発労働組合)

滝沢健二 (日本鉄鋼産業労働組合連合会)

〈一般演題〉

1. 長時間労働と疲労感について, 千田忠男, 他 (杏林大医衛生)
2. 「過労死」における過労について, 斉藤良夫 (中大文心理)
3. 長時間労働の健康問題に関する文献的考察, 井谷 徹 (名古屋大医衛生)
4. EクレチとPOSレチ作業による疲労感の比較, 北山孝充, 他 (労働衛生協会)

お知らせ

疲労とメンタルヘルス

第38回産業疲労研究会－学会時の自由集会－

徳島で開催される第65回日本産業衛生学会時の自由集会では、「疲労とメンタルヘルス」のテーマでお二人の会員に話題提供をお願いしています。また研究会から、長時間労働と健康に関する共同研究の提案を致します。多数の参加をお待ちしております。

司 会 松本一弥（東亜大学大学院総合学術研究科）

話題提供

吉竹 博（高知大学人文学部心理学）

疲労感研究の視点から

鈴木秀吉（高知県衛生研究所）

林業労働者の疲労とメンタルヘルス

日 時： 1992年3月29日（日曜）18時～20時

場 所： 徳島大学蔵本キャンパス（詳細は、第65回日本産業衛生学会プログラムを参照下さい）

資料頒布情報

「ジャストインタイムと労働負担」

【産業疲労研究会，1991.10月発行】

産業疲労研究会が立ち作業研究会と共催（1991年10月）した研究集会の抄録集。
500円で頒布（送料無料）しています。事務局までお申し込み下さい。

「わが国における最近20年間の職業性腰痛文献一覧」

【近畿地方会腰痛研究会，1992.1月発行】

1970年から1990年までに発行された国内雑誌に掲載された腰痛関連文献（単行本含む）
が487件収録された文献リスト。500円（送料175円別途必要）で実費頒布されている。

（申込み先：関西医科大学衛生学 徳永力雄氏まで，当研究会事務局でも扱っています）

編集後記

「会報」創刊号をおとどけします。年1回の発行予定ですが、会員の情報交換の「場」となるものにして行きたいと考えています。皆様のご意見ならびに自由なテーマでの原稿を今後ともお願いいたします。なお、この会報は、研究会登録会員に直接配布しています。会報発行を機会に関心のあるまわりの方にも研究会会員登録をおすすめいただければ幸いです。